



Title	在日朝鮮人の生きる社会：家族のナラティブに構築されるアイデンティティを手がかりに
Author(s)	薛, 桃子
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81939
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 (薛 桃 子)	
論文題名	在日朝鮮人の生きる社会 —家族のナラティブに構築されるアイデンティティを手がかりに—
論文内容の要旨	
本論文は会話参与者間の相互行為の実践であるナラティブ(語り)において構築される自己(アイデンティティ)を手がかりに、在日朝鮮人の生きる社会を浮き彫りにすることを目的としている。分析対象として在日朝鮮人である筆者の家族によるナラティブに表出する筆者の父親(在日朝鮮人2世、以後、仮名を桓一とする)のアイデンティティに焦点をあわせ、家族という親密な領域において構築されるアイデンティティから在日朝鮮人が生きる社会的現実を読み解いていく。 本論文は12の章から成り、研究の背景(第1章)、先行研究(第2章)、理論的背景(第3章)、調査・分析方法(第4章・第5章)、分析(第6章～第10章)、総合考察(第11章)、結論(第12章)といった内容を扱っている。以下各章を要約する。 第1章では、本研究の社会的背景、現状、そして在日朝鮮人の定義と呼称について本研究の立場を示した。在日朝鮮人の人権や法的地位の問題は70年代から80年代にかけて徐々に改善されてきてはいるものの、在日朝鮮人個人が直面する差別や排除の問題は不可視化、自己責任化(川端 2013)されている現状から、本研究では在日朝鮮人個人の日常実践の背景にある差別・排除の問題に焦点をあてている。 第2章では、アイデンティティの捉え方の変遷とこれまでの在日朝鮮人研究について概観した。 第3章ではまず、本研究におけるナラティブとアイデンティティの定義について述べ、筆者自身が在日朝鮮人であること(当事者性)と、分析対象者が家族であることにかかる懸念点に対し、本研究を貫く理論的枠組みを示すことで本研究の意義、立場を示した。さらに本研究の位置づけや、リサーチ・クエスチョンについて説明した。本研究では次の3つのリサーチ・クエスチョンを設定している。 ① ナラティブが行われるその時、その場所、その文脈において構築されるアイデンティティとはいかなるものか。 ② ナラティブとそこに表出したアイデンティティに映し出される社会的現実とはいかなるものか。 ③ ナラティブに表出したアイデンティティから見えてくる矛盾とはいかなるものか。 第4章では調査に関する方法として、インタビューデータの概要や、会話参与者である桓一と筆者についての基礎情報を示した。さらに桓一の生活史を簡単に振り返ることで、彼のアイデンティティを分析する上で前提となる情報を提示している。また、桓一の属する日本大韓民国民団(以下、民団)という民族組織についても概観した。 第5章では分析方法として、各分析の章で援用しているスモール・ストーリーの概念とポジショニング理論について説明した。 続いて第6章から第10章ではナラティブ分析を扱うが、第6章から第9章においては、ナラティブに表出するアイデンティティとそこから映し出される社会的現実について分析し、第10章においては第6章から第9章までで扱ったナラティブ・データをアイデンティティの矛盾という観点から分析した。 第6章のナラティブにおいて桓一は「故国」を国民国家名ではなくAという日本の地域名で語ることで、生まれ育った日本の中のAという地域こそが故郷だと捉えながらも、故国を日本という国家名で語ることができない自己を示していた。このことはすなわち、故国を国民国家という枠組みで語らない自己つまり、地域性で故郷を語るディアスポラとしての自己を表出していた。そして表出した自己の背景には、社会(マジョリティ)によって在日朝鮮人としてのアイデンティティを規定されるという社会的現実が見えてきた。 第7章のナラティブにおいて桓一は、初めての韓国訪問で「俺の故郷だ」と涙した友人Cを辛辣に批判してCを他者化することで、Cとは対極的な自己、つまり韓国を「外国である」と捉える自己を示していた。さらに、初めて体験した韓国が桓一の周辺の一世代の文化とも異なっているというスモール・ストーリーを挿入することで、日本・韓国のどちらの文化とも異なる在日独自の文化を持つ在日朝鮮人としての自己を示していると分析できた。そして、本ナラティブで展開された、日本社会において当然韓国人(外国人)としてカテゴリー化される在日朝鮮人が、憧れと期待を抱	

いて訪問した韓国において、またしても外国人としての自己を発見するというストーリーは在日朝鮮人社会ではよく語られるモデル・ストーリーであるが、桓一はこの経験を在日朝鮮人としての自己が形成される上で重要なものとして認識していることから、このモデル・ストーリーが在日朝鮮人の集合的アイデンティティを強固なものとする作用を担っていることが明らかになった。

第8章のナラティブでは、これまで韓国国籍にこだわってきた桓一が日本国籍の簡易取得権、選択権の獲得へと運動方針を180度転換するナラティブについて分析した。桓一は韓国国籍を維持したまま、地域住民としての権利を獲得するという民団の運動方針とは異なる運動方針を主張することで、民団や在日朝鮮人社会において支配的な言説から脱し、強い意志をもって立ち向かう運動家としてのアイデンティティを示していた。そして、桓一の運動家としての信念の変化の背景には、参政権(声)の無い在日朝鮮人が従来の運動方法で声を上げて、届かないという社会的現実と、在日朝鮮人を取りまく日本社会の状況の悪化(右傾化、排外主義等)があると言える。

第9章のナラティブでは、現在、日本国籍のみを保持する桓一の孫(4世)に韓国国籍をもたせるべきかというテーマについて語っている。桓一はナチスが血統を根拠にユダヤ人虐殺を行った歴史的事実を引き合いに出して、日本の右傾化、戦前回帰が進めば在日朝鮮人とその子孫は逃げなければならない状況に陥るという「仮説のシナリオ」を構築し、逃げ場所を確保するために孫に韓国国籍を取得させるのも一つの方法だと述べる。このナラティブにおいて孫のことを第一に考える祖父としてのアイデンティティが表出した時、桓一は「日本社会に立ち向かわなければならない」という在日朝鮮人社会(特に民団)における支配的な言説から脱して、次世代のためには「逃げる」ことも必要だという考えに転じている。本ナラティブにおいて、1世紀ほど日本に定着している在日朝鮮人が「逃げる」という最終手段を考えなければならない程に、桓一の家族が右傾化、排外主義等が指摘される日本の現状を深刻に捉えていることから、日常的に排除の脅威に晒される在日朝鮮人がいるという社会的現実が映し出しされた。

第10章では、第6章から第9章までで扱ったナラティブに表出したアイデンティティの矛盾について分析した。初めて訪問した韓国の印象を「外国だ」と述べた桓一(第7章)は、母国を「とりあえずは韓国かな」と述べており(第6章)、韓国の捉え方が矛盾している。また、在日朝鮮人問題に「立ち向かう」活動家としての自己を示す桓一(第8章)は、日本から「逃げる」ことで家族を第一に考える親、祖父としての自己を表出しており(第9章)、ここにも矛盾が生じている。さらに日本国籍の簡易取得権の獲得を目指す桓一(第8章)は、日本国籍を「権利」として取得してしかるべきと肯定的に捉える一方で、韓国国籍と民族アイデンティティを同一のものとする本質主義的な国籍観に囚われている自己が表出しており、さらなる矛盾を露呈している。

第11章では、これらの分析結果をまとめ、総合的に考察した。その結果、本論文で扱った各ナラティブに表出された桓一の自己には、一つの共通点が見られた。それは、国民国家という枠組みではなく地域性で故郷を語るディアスポラとしての自己、民族本質主義的な他者を批判する自己、韓国を外国として捉える自己、民団の推進する運動方針とは正反対の運動を主張する自己、在日朝鮮人社会において支配的である「日本社会に立ち向かう」運動とは対照的な「逃げる」ことを主張する自己というように、すべて本質主義的で民族主義的な言説や、民団や在日朝鮮人社会において支配的な言説に対抗する自己だということである。

しかしながら、ナラティブの中で国籍と民族アイデンティティを同一視する本質主義的な言説が桓一を束縛している側面が確認された。つまり、桓一は一貫して在日朝鮮人社会、特に民団という民族組織において支配的な言説に抗う自己を示そうとする反面、無意識下でその言説に囚われている自己と拮抗している姿が浮き彫りとなり、在日朝鮮人社会が構築する言説の問題の大きさが露呈する。したがって、日本社会の問題のみならず、在日朝鮮人社会に蔓延する民族主義的、本質主義的な言説によって桓一の葛藤が引き起こされていることが確認できた。

以上のことから、日本と韓国ひいては東アジアの歴史的・政治的背景や、日本社会、在日朝鮮人社会に蔓延する言説、またマジョリティの在日朝鮮人についての知識の欠如や無関心、マジョリティの構築した「朝鮮人」像で眼差されてきたことが在日朝鮮人の自己や社会的立場に影響を与えてきたと言える。さらに、訴え続けても届かない在日朝鮮人の声の存在が浮き彫りになった。

最後に第12章では本研究の結論について述べている。本研究では、ある在日朝鮮人家族によるナラティブという相互行為実践の中で、様々に異なった立ち位置(アイデンティティ)が構築される様子が確認され、アイデンティティの流動性、複数性、未決定性を実証することができたと言える。また、集合的アイデンティティ(民族アイデンティティ)が彼のアイデンティティにいかん葛藤や矛盾を与えているのか、つまり個人的アイデンティティと集合的アイデンティティがせめぎ合う様子も描き出した。そして、文脈によって様々な顔を見せるアイデンティティの矛盾や揺れにこそ、在日朝鮮人の姿と彼らの生きる社会を想像しなおす鍵が隠れていたと結論付ける。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (薛 桃子)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	准教授	秦かおり
	副 査	教授	三藤博
	副 査	教授	植田晃次

論文審査の結果の要旨

本論文は、ある1人の在日朝鮮人の継続的なナラティブにおいて構築されるアイデンティティを分析し、日本における在日朝鮮人についての社会的現実を明らかにすることを目的としている。分析対象として在日朝鮮人である筆者の父親(在日朝鮮人2世、以後、仮名を桓一とする)に焦点化し、彼を取り巻く人々(在日朝鮮人3世である筆者やその他の家族)も合わせた空間において行われる相互行為において表出・構築されるアイデンティティを炙り出すことで、そこから考察される在日朝鮮人が生きる社会的現実を読み解いたものである。

本論文は全12章で構成されている。まず第1章においては、近年の社会状況に照らした差別・排除の問題を端的にまとめ、在日朝鮮人の人権や法的地位に関する歴史的背景情報とその延長線上にある今日の在日朝鮮人が直面する顕在化・潜在化された差別問題について整理している。第2章では、本論文の鍵概念であるアイデンティティについて先行研究を概観した上で、在日朝鮮人のアイデンティティ研究について詳細にまとめている。そして本研究の立ち位置について、近年の在日朝鮮人研究に多く見られるアイデンティティ・ポリティクス研究や、共生社会の実現への提言ではなく、在日朝鮮人がいかに日本社会を生きているのかといった日常の姿を質的にかつ詳細に分析し、彼らが置かれている社会的現実に迫ることに主眼が置かれているとその立場を明確にしている。続く第3章においては、理論的背景としてナラティブ研究の流れと本研究における定義を明らかにし、さらに当事者性(筆者自身が在日朝鮮人であること)を持つ研究であることや、分析対象者が家族であることにかかる研究上の懸念を払拭する理論的枠組みとして「社会学的想像力」を挙げ、さらにアクティブ・インタビューを選択することで、本研究の意義と立場を提示した。このことは、本研究に対する根本的な弱さと捉えられがちな側面(客観的な分析への猜疑や調査対象者の設定への疑念)を丁寧な論述と理論構築によりしりぞけ、論文の正当性を主張し確立させたものとなっており、大変意義深い。

第4章と第5章では調査・分析方法を記している。調査対象者の基礎情報への言及があるが、その中で桓一が深く関わった民団(在日本大韓民国民団)について詳しく述べられており、桓一が単に筆者の家族だから調査対象者に選ばれたのではなく、在日朝鮮人として日本に抗する運動の渦中にあった人物であることが選択の背景にあることが明かされている。つまり、本研究は民族としてのアイデンティティを強化し発信していく側でもある人物に直接調査をしたものとして希少性が高くその価値が裏付けられている。続く第6章から第11章の分析・考察結果では、個人のコンテクストの変化や相互行為の場で揺れ動く複合的なアイデンティティをマルチモーダル分析も用いて丁寧かつ詳細に論じており、韓国にも日本にも帰属しないディアスポリックな自己の表出と、その背景にある日本と韓国の歴史的・政治的背景を記述しつつ、日本社会と在日朝鮮人社会に蔓延する支配的言説や「在日朝鮮人」像に抗いながらもそれらが自己決定に大きく影響を与える様相を考察している。最後の第12章では、個人的アイデンティティと集合的アイデンティティ(民族アイデンティティ)との間で生じる葛藤や矛盾、アイデンティティの流動性、複合性、未決定性を示し、それらの文脈によって異なるアイデンティティの矛盾や揺れが、在日朝鮮人の姿と彼らの生きる社会を想像しなおす鍵になると結論づけており、在日朝鮮人のアイデンティティ研究として高く評価されるものである。

一方、本研究の問題点として幾つかの点が挙げられる。まず1つ目は、在日朝鮮人の近代史の捉え方がややステレオタイプ的であり、現代の在日朝鮮人研究も踏まえて俯瞰的に観察する視点が要求される。2点目に、先行研究から導き出された方法論が必ずしも全ての分析に活かされておらず、方法論の一貫性に改善の余地を残している。

3点目として、日本社会からの影響は示されているものの、韓国社会からの影響といった観点が不足しており、在日朝鮮人としてのアイデンティティ形成に関与していると推測されるこの側面は加味されるべきであったと考えられる。しかしながらこれらの点は、今後さらに本研究を発展させるための課題であり、本論文はアイデンティティ研究への貢献、在日朝鮮人の記録としての歴史的価値、日本社会の差別・排除問題を映し出す鏡としての在日朝鮮人の姿についての実証的研究として高く評価されるものである。

以上のような理由で、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。